

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

トルコ語の *-ki(n)* とモンゴル語の *-x* との比較・対照

－共時的・通時的両面からの検討－

A contrastive and comparative study

between Turkish *-ki(n)* and Mongolian *-x*

風間伸次郎

KAZAMA, Shinjiro

トルコ語の $-ki(n)$ とモンゴル語の $-x$ との比較・対照

—共時的・通時的両面からの検討—

風間伸次郎

キーワード：チュルク諸語・モンゴル諸語・物主形・屈折／派生

0. はじめに

トルコ語の $-ki(n)$ とモンゴル語¹の $-x$ はその形式・機能の両面において共時的にきわだった類似を見せている。またその形態論的な位置づけが難しい点も共通していて、類型論的な観点からみても興味深い。他方、チュルク諸語およびモンゴル諸語のそれぞれの諸言語には広く同語源の形式が観察され、その歴史的起源や借用の方向性が議論されている。

本稿では、まずコンサルタントからの聞き出し (elicitation) による調査によって、トルコ語とモンゴル語両言語における問題の接辞の接続や機能面での特徴を対照する。しかるのちに広くチュルク諸語およびモンゴル諸語の言語における同語源の形式について記述を確認し、その歴史的起源や借用の方向性について検討する。

なお特にことわりのない限り、和文以外の文献からの翻訳は筆者による。例文のグロス、翻訳、文字飾り等も同じく筆者による。

1. 先行研究

ここではトルコ語の記述として主に Göksel and Kerslake (2005) を、モンゴル語の記述として Kullmann and Tserenpil (1996) を検討する。

1.1. トルコ語の $-ki(n)$

Göksel and Kerslake (2005: 71-72) では問題の $-ki(n)$ を、複数と格、所有とならぶ屈折標識として扱っている。ちなみに同じ扱いを受けているのは他に $-(y)la/$

¹ ここでいうモンゴル語とは、モンゴル語ハルハ方言を指すものとする。以下でも同じくハルハ方言を指すものとする。なおモンゴル語のキリル文字からの転字は梅谷 (2017) の方式による。

ile (具格的な意味等を示す)があるのみである。以下に Göksel and Kerslake (2005: 71-72) の記述を要約する。

-ki(n) はアクセントを担うが、ある場合に先行する ü と母音調和する以外、不変化である：ev-de-ki²「家にある (もの)」、ora-da-ki「向こうにある (もの)」、siz-in-ki「あなたの (もの)」、kız-in-ki「その女の子のもの」、suy-un-ki「水に属するもの」。

dün「昨日」と gün「日」(もしくはこれを含む語) に接続する場合、この接辞は ü と発音され、またそう書かれる：bugün-kü/bugün-ki「今日の」、dün-kü/dün-ki「昨日の」。その他の場合には i と発音される：gül-ün-ki「バラのそれ」。

格接辞もしくは -CA³ に後続される場合にのみ、(pronominal) n⁴ が現れる：ev-de-kin-de「家のそれに」。

-ki(n) には 2 つの機能がある：一つは限定的な形容詞句を形成し、二つ目には代名詞句を形成する⁵。これらは次のように形成される：

(i) 時を示す副詞に直接 -ki(n) をつける：yarin-ki (gazete)「明日の (新聞)」、bu sene-ki (portakallar)「今年の (オレンジ)」、her zaman-ki「いつもの (もの)」。

なお時の副詞が -(s)I 複合語の形をとる場合には、-ki(n) の前で複合語標識は脱落する：Salı gün-kü (programlar)「火曜日の (番組)」。

(ii) 処格を伴った名詞句や後置詞に -ki(n) をつける：sokak-ta-ki araba「道の車」、önünüz-de-ki「あなたの前のもの」。

(iii) 属格を伴った名詞句に -ki(n) をつける：sen-in-ki「おまえの (もの)」、adam-in-ki「その男の (もの)」、oda-nın-ki「その部屋のもの」(このようにして形成されたものは代名詞的なもののみである)。

-ki(n) を伴った代名詞的な形式はさらに屈折しうる。

(i) 複数接辞 -lAr をとる：masa-da-ki-ler「テーブルにあるもの (PL)」。

² 本稿では紙面の都合上、大部分の場合にグロスを省略している。以下に本稿に現れるトルコ語の諸形式を示しておく (なお大文字は母音調和などによる異形態のあることを示す)：-lAr PL, -(n)In/-Im GEN, -(y)A DAT, -DA LOC, -DAn ABL, -Im: 1SG.POSS, -In: 2SG.POSS, -(s)I: 3POSS, -ImIz: 1PL.POSS, -InIz: 2PL.POSS。なお例では、問題の形式とそれに先行する格などの要素のみハイフンで区切って示すことにする。

³ 形容詞/副詞の形成接辞である。Göksel and Kerslake (2005: 59-60) 参照。

⁴ 3 人称の所有人称接辞の後ろに一部の格がくる場合、所有人称接辞と格の間に n が現れるが、これを pronominal n という (林 (1995: 111))。

⁵ (i) 時を示す副詞に直接 -ki(n) のついたもの、および(ii) 処格を伴った名詞句や後置詞に -ki(n) のついたもの、は限定的形容詞句としても代名詞句としても機能するが、(iii) 属格を伴った名詞句に -ki(n) のついたものは、代名詞句としてしか機能できない。以上 Göksel and Kerslake (2005: 195-196, 284-285) による。

masa-nin-ki-ler 「テーブルに属するもの (PL)」。結果的に、-ki(n) を伴った語は時に 2 つ以上の複数接辞を取りうる：masa-lar-da-ki-ler 「テーブル (PL) にあるもの (PL)」。

(ii) 単数もしくは複数の形式に格接辞がつきうる：ben-de-kin-e 「私の持っているものへ」、ev-in-ki-ler-i 「家に属するものを」、bahçe-de-kin-den 「庭にあるものから」 結果的に、-ki(n) を伴った語は時に 2 つ以上の処格もしくは属格標識を取りうる：anne-m-in-kin-in (rengi) 「私の母のもの (色)」、ev-de-ki-ler-de 「家にあるものに」。

(iii) -(y)lA/ile 「～と、～で」、-CA 「～によると」、-sIz 「～なしの」のうちのどれかをとりうる、-(y)lA/ile との組み合わせは規則的 (regular) である：sokak-ta-ki-yle 「通りにあるもので」、mutfak-ta-ki-ler-le 「台所にあるもので」、araba-nin-ki-yle 「車のもので」、perde-nin-ki-ler-le 「カーテンのもので」。まれに -ki と -CA もしくは -sIz が組み合わせることもある：Amerika'-da-ki-ler-ce 「アメリカにあるものによって」、bahçe-de-ki-ler-siz 「庭にあるものなしで」。

-ki は、すでに -ki を伴った属格や処格の形式につくことがある：ev-de-ki-ler-in-ki 「家にあるもの (PL) に属するもの」、anne-m-in-kin-de-ki 「私の母のものにあるもの」。

1.2. モンゴル語の -x

以下は Kullmann and Tserenpil (1996: 101-105) の記述による。

格に束縛された接辞 (CbS: case-bound suffixes) は格ではないが、格を伴った形式につく。格に他の接辞が後続することはモンゴル語では一般的でない。これらは派生接辞でも屈折接辞でもなく、機能は多様である。起源的にはこれらは (2 つの形を持つ) 1 つの接辞である：

本来の単数形：-x, -xi, (-ix) 文語形 ki

本来の複数形：-xan, -xen, -xon, -xön 文語形 kin

- ・所有の CbS：-x、機能：所有の機能、例：min-ij-x⁶ 「私のもの」
- ・場所の CbS：-x、機能：家とかユルタのより抽象的な意味、例：man-aj-x-aas 「私の家から」
- ・集合の CbS：-xAn、機能：同じグループの人々、例：Gov-ijn-xon 「ゴビの人たち」
- ・限定の CbS：-x, -xi、機能：限定的機能、例：urduur-xi 「前にある、南にある」

⁶ 以下に本稿で問題となるモンゴル語の諸形式を示しておく：-yn/-(g)ijn/-ny/-nij/-n: GEN, -(g)AAr: INS, -(g)AAs: ABL, -(A)D DAT-LOC, -yg/-(g)ijg: ACC, -tAj: COM, rUU: DIR。なお例では、問題の形式とそれに先行する格などの要素のみハイフンで区切って示すことにする。

所有の CbS は文法的機能を持つ。場所の CbS と集合の CbS はともに、語彙的な機能を持つ。限定の CbS は文法的な機能を変える。

①所有の CbS -x

所有の CbS は属格を伴った語につき、口語で頻繁に用いられる：

Ene xen-ij-x ve? Ene min-ij-x. 「これは誰の?」「これは私のだ」。

Ene juun xüüxed ve? Ene manaj angi-jn-x.

「これは何の子供か?」「これはうちのクラスの子供だ」

Ene tos nüür-nij-x üü? Ügüj, gar-yn-x.

「このクリームは顔用の?」「いや、手の(手に使うもの)だ」

その語が名詞として用いられた場合、他の接辞がさらに後続しうる：

Min-ij-x čin-ij-x-ijn derged šine.

「私の(例えば「ペン」)はあなたののに比べて新しい」(属格)

Min-ij-x-ed xool ögčee.

「私の(例えば「犬」)に誰かが食べ物をくれた」(与位格)

Či Baatar-yn-x-yg unš. 「おまえはバータルの(例えば「本」)を読め」(対格)

他に奪格、具格、共同格、方向格の例があがっている。

②場所の CbS -x

この CbS は正確な意味を持っているものの、一語で訳すことは難しい。この接辞の意味は、場所、家、特定の個人もしくは家族の部屋と関連があり、家族そのものを指すことはまれである。minijx, činijx, bidnijx, tanyx のような形を持たない。tednijx は可能であるが、その意味は「彼の家」、「彼のユルタ」などのみである。

Man-aj-x nüüsen. 「私の家族は引っ越した」

Manaj bagš-ijn-x end bajna. 「私の先生の家はここにある」

Tan-aj-x xaana bajna? 「あなた(と家族)はどこに住んでいるのか」

名詞的意味(家、ユルタ)を持つため、さらに格がつきうる。ただし抽象的な意味であるため属格はつかない。与位格が後続する際には -x は落ちる。英語の対応表現 “We ate at Millers”; “There was a party going on at Birds” と対照できる。

Tedn-ij-d bi orž üzeegüj. 「私は彼の所を訪れたことがない」(与格)

Bi tüünd ax-yn-x-yg zaaž ögsön.

「私は彼に私の兄の家を見せてあげた」(対格)

Bid manaj-x-aas uuland javsan. 「私たちは私の家から山へ行った」(奪格)

Bi Dorž-ijn-x-oor orson. 「私はドルジの家で泊まった」(道具格)

Manajx ax-yn-x-taj ajl buusan.

「私たちは私の兄の家族たちと隣人として落ち着いた」(共同格)

Ter bagš-ijn-x ruu javsan. 「彼は先生の家へ行った」(方向格)

③集合の CbS -xAn

この形式は本来複数であり、現在もその意味を保持している。属格に後続し、例えば「同じテーブルについている」というような共通した何かを有する人々のグループ、もしくは親類やクラスメートなど同じ集団に属する人々を示す。同じ語でも文脈によってさまざまな意味になる。例えば *manaj-xan* は場合によって家族にも、親戚にも同級生にも解釈されうる。

Man-aj-xan margaaš xičeel xijxgüj. 「私たちは明日授業がない」

Tan-aj-xan sajn biz dee. 「あなたがた(の家族)は元気ですよね?」

Gadaad-yn-xan töröl bürijn nogoo idex durtaj.

「外国人たちはあらゆる野菜を食べたがる」

Xödöön-ij-xön xool xünsee öörsdöö beltgedeg.

「田舎の人たちは食糧を自分たちで用意している」

Manaj angi-jn-xan margaaš ceverlegee xijne.

「私たちのクラスメイト達が明日掃除をします」

Tednij bajr-ny-xan ix xögziltej. 「彼らの宿舎の者たちはとても元気がいい」

この用法のこの接辞の後ろには全ての格(属格、与位格、対格、奪格、道具格、共格、方向格)が後続しうる。この集合の *-xAn* は *manaj, tanaj* につくことが多い。

④限定の CbS -x, -xi

ほとんどの格の形式は動詞によって後続される。属格のみが名詞に後続されうる。このため、限定の CbS はこの弱点を補うために用いられる。すなわち、文構造を変えることによって、動詞でなく名詞が後続できるようにするのである。英語では往々にしてこのことを表現するのに従属節を用いる。与位格とこの限定の CbS がともに用いられると、新しい語である *dax'/dex* を形成する。

Urd-xi zamd xüüxdüüd toglož bajna. 「南側の道で子供たちが遊んでいる」

Zuslan ruu-xi zam muu bajna. 「夏當地への道は悪い」

Minij gar-t-xi üzeg ix sajn. 「私の手にあるペンはとても良い」

Xojguur-xi gol örgön. 「北へ向かう川は広い」

Manaj bajšingijn urd-xi ceceg sajxan. 「私の家の前の花はきれいだ」

Xot xürtel-x⁷ xugacaand bid juu č jariagüj.

「町までの間、私たちは何も話さなかった」

⁷ *xürtel* は動詞の副動詞形に由来し、後置詞的に用いられる。この形式に *-x* がつくことに関しては、梅谷 (2017) を参照されたい。

Darxan dax' ene bajguullaga oros dargataj.

「ダルハンにあるこの機関にはロシアの指導者がいる」

Emneleg dex övčtönüüd gomdol gargažee.

「病院にいる患者たちは不平を言い出したそうだ」

他に、次のような副詞がしばしばこの接辞を伴って用いられる：

deer-x「上にある～」、door-xi「下にある～」、dees-ix (dees-xi)「上の方の～」、
dooš-ix (dooš-xi)「下の方の～」、naaš-ix (naaš-xi)「こっち側の～」、caaš-ix
(caaš-xi)「あっち側の～」。

-x がどのような形に接続するか、接続した形がどのように機能するかについて、梅谷 (2017: 73) の記述を以下に要約する。

多くの先行研究が指摘するように、-x は格接尾辞の後に現れる。-x は属格、与位格、方向格の接尾辞の後に現れうる。属格接尾辞の後に -x がついて形成された語は、句の主要部として（すなわち「名詞として」）用いられる。与位格接尾辞、あるいは方向格接尾辞の後に -x が付いて形成された語は、主として連体修飾の機能を果たす。-x が属格接尾辞と与位格接尾辞に付加され、他の格接尾辞の後に現れない理由については、Janhunen (2012: 116) が次のような推測を述べている。

Janhunen (2012: 116) の推測は下記のとおりである。

共格 (-tai³) と欠格 (=gwai) は特別な標示がなくとも名詞化されうる。他方、特に対格と具格を含む他のいくつかの格は、名詞化の表示によって行われる統語的操作を要求しないようだ。理論的に -x と結びつくと考えられる他の唯一の格は奪格だが、その例は見出されていない。これはこの言語特有の理由によるものかもしれない。

なお山越 (2012: 225) は、属格の後に接続する -x について、「派生された名詞がさらに格接尾辞を接続することも可能なため、本書では派生接尾辞のひとつとして分類」するとしている。

1.3. チュルク諸語全般における -K⁸ およびその歴史的来源

以下 1.3.1. ~ 1.3.5. は Luutonen (2011) より要約した。

1.3.1. チュルク諸語とモンゴル諸語における問題の接辞の借用の方向

以下は Luutonen (2011: 92-96) より要約した。

⁸ Luutonen (2011) は問題の接辞の古代チュルク語の同源形式に由来する後世のチュルク諸語における諸形式を -KI で示している。本稿は広く、さらに古代モンゴル語での同源形式ならびにそれに由来するモンゴル諸語における諸形式も -KI で示すことにする。

今から 800～2500 年前におけるチュルク、モンゴル、ツングースの拡張の結果が現在のそれぞれの語族の分布であるといえよう。その拡張の間にこれらの言語は互いに接触し、互いにより似通ってきたと考えられる。

チュルク諸語とモンゴル諸語の両方において、問題の接辞は処格／与位格と属格という同じ格につく点が注目される。

チュルクとモンゴルの接触の期間において、借用はもっぱらチュルクからモンゴルへという方向で起こった。Janhunen (2003a: 89), Schönig (2003: 404, 407, 416) はともにモンゴル諸語における **-ki* はチュルク諸語からの借用であるとみている。両語族における広範な分布から見て、その借用はかなり古い時期のものであろう。さらに、この形態素の現れ方がきわめて類似していることから、完全なバイリンガリズムのもとで借用は行われたのであろう。チュルク諸語が与え手であることは、モンゴル諸語において **-ki* の接続する与位格形が通常の *-Tur* ではなく、*-TA* であることから支持される。他方で、モンゴル諸語における *-ki* は古い処格の **-A* とも共起する。もし **-TA-ki* の組み合わせが本来的なものであるとすれば、**-A-ki* の形式は類推によって生じたものだろう。

古代チュルク語およびチャガタイ文語においては、[属格＋*-KI*]の組み合わせが存在しない。もし対応する組み合わせがモンゴル諸語のもっとも初期の形式において実証されれば、上記のように仮定されている借用の方向に疑問を投げかけるものとなろう。モンゴル諸語の *-ki* とチュルク諸語の *-KI* の全ての言語における細部にわたる通時的および共時的研究が、これらの接辞の関係の問題に最終的な結論を与えるために必要である。現時点ではチュルク諸語からモンゴル諸語に借用されたという説の方が説得力があると考えられる。

1.3.2. 類型論的考察

以下は Luutonen (2011: 112-115) より要約した。

次のような形態論における類型特徴が *-KI* のような接辞の存在を可能にしている。1) 語幹に曲用接辞のついたものが、派生語のようにさらに屈折する、2) 接辞は容易に分析可能で、その結合は緩い（つまり膠着的な特徴を持っている）。

統語論における類型としては、処格の名詞を修飾語として用いるのを避ける傾向があり、他方、もっぱら修飾語は被修飾語に先行するため、(トルコ語における) 次のような語の連続は名詞述語(文)としての解釈を受ける：*araba-da adam* 「車にいるのは男だ」。-*KI* を用いればそのような潜在的な曖昧性は解消される：*araba-da-ki adam* 「車にいる男」。したがって上記の矛盾する 2 つの条件がチュルク諸語における *-KI* の発達を促したのだとみる。

意味論的には、トルコ語で与格や奪格に *-KI* がつかないこと (**Almanya'-ya-ki* (ドイツ-DAT-ki)、**dükkan-dan-ki* (店-ABL-ki)) を、正確にこれらの語が意味するところを理解するのが難しいため、とみている。

1.3.3. 古代チュルク語における *-KI*

以下は Luutonen (2011: 30-34) より要約した。

古代チュルク語ではすでに場所の格が直接に連体修飾をすることはまれであり (irinčü-dä boš 「罪において 自由」)、そのような場合に *-KI* が用いられていた (baliqim-ta-qı bodun 「私の町にいる人々」)。空間的意味の後置詞や副詞も *-KI* をとることができた (suw üzä-ki 「水の向こうの」、içrä-ki 「内側の」)。空間や時間における位置関係を示した (čöl-gi 「草原にいるもの」、ay-qı 「月ごとの」)。

現代のトルコ語などと比べると、古代チュルク語における *-KI* の状況は次の2点で大きく異なる：

- ① 処格の介在なしで、直接空間的な意味の名詞に接続する。
- ② 属格に接続しなかった。古代チュルク語において、属格形は名詞述語としても機能した (män-iq ol 「私のものだ、彼は」)。こうした用法はチャガタイ文語及び古タタールのテキストでも典型的である。

属格に接続しなかったことに対して、Luutonen (2011: 31) は、[1] 属格に *-KI* の後続する形式は比較的最近の改新である、[2] 属格に *-KI* の後続する形式は古いが、もともと極めて限られた地域で限られた範囲でのみ用いられた、という2つの可能性を提示した上で、チュルク諸語のうちの広範囲の言語に認められることから、後者の説を支持している。ただいずれにせよ、処格につく *-KI* と属格につく *-KI* は独立に発達したことは明らかであろうとしている。

かつて古代チュルク語の *-KI* は奪格およびアーカイックな与位格 (-A) にもついた (sol-tın-kqı 「左にあるもの」、biri-y-ä-ki 「南にあるもの」)。

1.3.4. *-KI* の起源／語源に関して

以下は Luutonen (2011: 116-119) より要約した。

古代チュルク語、古代及び中期のオスマン語、チャガタイ語において、*-KI* は前舌と後舌の異形態を持っていた (*-ki* ~ *-qı*)。古代チュルク語で後舌の異形態は前舌のものよりまれであったという。

-KI は直接名詞に後続するときには、四季を示す語とともに用いられることが最も多かったという (例えば *qış-qı* 「冬の」)。したがって時を示す *-KI* の用法は頻度が高く、きわめて古いものとみられる。しかし時の表現がもっとも本来的な機能を示すものであるかという問いに答えることは難しいとしている。古代チュルク語の *čöl-gi* 「平原の (／平原に住む)」の

ように場所を示す例も古くから存在する。

形態素 *-KI* の起源については以下の 3 つの可能性を検討している: 1) 独立語に起源をもつ、2) 本来的な派生接辞に起源をもつ、3) 派生接辞であったが、のちに代名詞的な要素を伴うようになった。

トルコ語のある種の小辞／後置詞が屈折接辞を介して名詞に後続すること (*sen-in için (you-GEN for)* 「おまえのため」) からの類推と、*-KI* の持つ小辞的な性格から、*-KI* は本来小辞であったとする説がある。

-KI のもつ直示的な性格に注目し、直示および弁別の小辞 *ki* (他の変種は *go, ku*) と比較しているものもある。この古代チュルク語の要素はのちにペルシャ語からの接続詞と混合した。

指示詞が起源であるとする説は、代名詞が通言語的に容易に従属接続詞、関係代名詞、定冠詞、焦点表示などに文法化するということから支持される。この説は「昨日の(もの)」、「家の中の(もの)」のように副詞や格形式に *-KI* のついたものをよく説明するが、「冬の」のように四季を意味する語について形容詞的な語を作る用法を十分に説明できない。

-KI が本来あるものとの関係を示す語を派生する古い接辞であったという可能性は、一部のチュルク諸語における助数詞の形成との関連で取り上げられている。この説は「冬の」のような例をよく説明する。

しかし *-KI* は、これを単に派生接辞を起源としたものと考えたのでは、いわゆる ‘pronominal n’ を説明することができない。したがって *-KI* は何らかの形容詞派生接辞が代名詞的な要素を伴ったものが起源であったという可能性が考えられる。この説は *-KI* で形成された語の直示的な性格をよく説明する。

1.4. モンゴル諸語全般における *-KI* とその歴史的来源

Janhunen (2003a: 88-89) はモンゴル諸語全般における *-KI* に関して次のように述べている (筆者の要約による)。

すべてのモンゴル諸語は **-ki* もしくは **-ki/n* を持つ。これはもっとも一般的には与位格につき、**-TA-ki* 「～に位置する(もの)」を形成する。同じ標識が場所名詞、後置詞、副詞に後続する。*dexer-c-ki* 「上にある(もの)」のような例では、古い場所格の **-A* を含む。属格についたものは、修飾語として機能するよりも、述語として機能する: **ene mori aka-yin-ki (bui)*. 「この馬は兄のだ。」

-ki* は伝統的に場所名詞に対する出名派生接辞として分析されている。しかし、他のすべての出名派生接辞とは異なり、-ki* は単純な名詞語幹にはつかず、屈折した格形の後につく。属格もしくは与格の後であればその生産性はきわめて高い。したがって **-ki* をモンゴル諸語に共通な二重曲用の表れとみることができる。**-ki* はしたがって斜格から形成される有標

主格 (a marked nominative) である。*-ki による有標主格はさらに再び格をとって曲用する：*ger-te-ki-dür 家-DAT-ki-DAT。モンゴル諸語の *-ki はチュルク諸語に完全な対応物 (an exact parallel) を持っている。

以下では『元朝秘史』モンゴル語における -KI について検討する。

小沢 (1997: 249-250) は、蒙古語文語の =ki⁹~=kin, -dAki~dAkin について、次のように述べている (筆者の要約による)。

-ki~kin は実詞の属格形に続き、(〜に属するもの) を意味する実詞を作る。-kin は集合的な意を表す形である。

ulus (国; 人々) → ulus-un=ki (国のもの)

ābu (父さん) → ābu-yin=ki (父さんのもの)

minu (私の) → minu=ki (私のもの)

nutuG (故郷) → nutug-un=kin (故郷のもの、人々)

orčim (附近) → orčim-un=kin (附近のもの、人々)

tanu (あなたの、君の) → tanu=kin (あなたの処のもの、人々)

歴史的には、この接尾辞 =ki~=kin は余り古くはなく、秘史蒙古語には見られず、蒙古源流 (1662 年の作) にも endeki (ここにある) など僅かな語に発見されるのみである。秘史蒙古語の -u'Āi—文語形は -u-gAi—と、この属格形に続く =ki~=kin は、その表わす意味の点では近いものがある。

-dAki~dAkin は上の=ki~=kin と与位格語尾との合成接尾辞である。(〜にある(もの)、〜における(もの)) を意味する接尾辞である。-dAkinの方は集合的な意味を表わす。

delekei (地球; 世界) → delekei-deki (地球上の; 世界にある)

agūla(n) (山) → agūla-daki (山にある、山に属する)

Gajar (地、土地) → Gajar-taki (土地にある、土地に属する)

kökeqota (フフホト) → kökeqota-daki(n) (フフホトにある(もの))

ger (モンゴル包) → ger-teki(n) (ゲルにある(物)、ゲルにいる(物))

栗林・确精扎布 (編) (2001: 202, 876, 889, 891) によれば、-daki および -deki はそれぞれ 1 例、合計 2 例しか見られず、他方 -u'ai は 14 例、-u'ei は 4 例観察される。問題の 2 例を小沢 (1997: 166) より示す。2 例は 1 か所に対になって表れていて、しかもチンギス可汗のセリフの中にある (つまり口語である) ことも

⁹ 小沢 (1997) は語尾にはハイフン、付属語には波線を用いているが、本稿では付属語の標示をダブルハイフンに統一した。なお小沢 (1997) の例では =ki(n) はもっぱら付属語扱いとなっているものの、説明文中では一部 -ki(n) のように語尾扱いになっているところがある。誤植と考えられるが、小沢 (1997) 自身も迷っていた可能性があると考え、原典のままにしてある。

注目される。

Činggis qahān Sorqan-šira-yi
チンギス 可汗は ソルカン・シラのことを

ügülerün küjü'ün-deki kündü modun-iköser-e o'öru'ülüGsan,
言うのに 頸のところが 重い 木を 地面へ 棄てさせたのは

jaqa-daki jarbiyal modu-n-i jayila'ülüGsan ta ečiges kö'üd-ün
襟のところが 積 木を はずさせたのは お前達 父 子等の

tusa aju'üi-je ta yekin udaba ta ke'ēbe.
功益 であったぞ、 お前達 どうして おくれたか お前達は、 と言った。

「所有形式」という用語は所有構造における前項や人称所有接辞などと紛らわしいので、「～のもの」という意味を実現する形式を、以下ではロシア語学などで用いる用語に倣って、「物主」形と呼ぶことにする。現代のモンゴル語で物主形は属格に *-KI* の続く形によって示されているわけだが、かつてのモンゴル語では必ずしもそうではなかったようだ。

以下は小沢 (1984: 158) の要約である。

-'äi/'ei はハルハ方言の *minijx*、《私のもの、私に属するもの》、*činiyx* 《君のもの、君に属するもの》の *-x* (文語の *-ki*) に相当するものと思われる (《～のもの》を意味する形態素と思われる)。

Kullmann and Tserenpil (1996) では、文語形に関して、*-ki* を単数形、*-kin* を複数形とし、「集合」の用法においてのみ、現代語で *-xAn* の形式が用いられるとしていた。近世の文語では衰退したが、中世蒙古語には *-n* による複数形が存在した (小沢 (1997: 81-82))。小沢 (1997: 81-82) には 3 例があがっているがこれらを見る限りもっぱら人間名詞にのみつくようである (なおモンゴル語においては他の複数接辞も同様である)。語末の *-n* は、モンゴル語では一般的に、人間を表す名詞において固定的に残存した以外、規則的に全て失われたという。このことに関する記述を大竹 (2012: 27) より下記に要約する。

モンゴル系の諸言語には、「不定の *n* (unstable *n*)」と呼ばれる、特定の名詞類の語幹末でゼロと交替する *n* (あるいは **n > ŋ*) が存在する。例えばモンゴル語ハルハ方言では、この *n* 持ちの語は、主格・対格・造格・共同格では語幹末に *-n* が現れず、属格・与位格・奪格のみで *-n* が出現する。中世モンゴル語ではすべての格で *-n* が現れうるが、*n ~ Ø* の交替があり、*n* を有する形式は名詞の定性 (definiteness) を、ゼロ形式は名詞の不定性 (indefiniteness) を表すと考えられている (小沢 2005: 77-120)。ダグール

語では、数詞および一部の代名詞を除いて、この *-n がまったく失われた。ただし、固定的に *-n を残す場合が見られる。例えば次のような例がある（参考としてハルハ方言形 (Kh) をモンゴル国正書法によって附す）。

| Da. | MM | WM | Kh. | gloss |
|-------|--------|-------|-------|---------|
| əjiŋ | eje/n | ejen | эзэн | 「皇帝；主人」 |
| irgəŋ | irge/n | irgen | иргэн | 「庶民；漢人」 |
| katuŋ | qatu/n | qatun | хатан | 「妹（尊称）」 |
| ugiŋ | öki/n | ökin | охин | 「娘」 |

いずれもある地位・関係にある人間を表す名詞であり、ハルハ方言をはじめほとんどの方言・言語で同様の傾向を示す。

1.5. 先行研究のまとめと問題点

まず（現代）トルコ語と（現代）モンゴル語の共時的な先行研究の記述に関しては、大きく分けて2種類の次のような問題点（もしくは不明な点）があると考ええる。

1. 接続の仕方とその範囲に関する問題点

- ・モンゴル語において、時間を示す種々の名詞や副詞に -x がつくのかつかないのか、もしつくなら、その際は直接につくのか？
- ・両言語で、少なくとも一部の相対的な場所を示す場所名詞／副詞／後置詞にも -ki(n) / -x がつくが、詳しくはどれにつきどれにつかないのか？、その際処格／与位格がついてからその後ろにつくのか、それとも直接つくのか？
- ・両言語で、奪格をはじめとする他の格には本当に接続しないのか？

2. できあがった語／句の機能

- ・トルコ語の -ki(n) において、モンゴル語に見られる「場所の CbS」や「集合の CbS」に対応する機能は存在しないのか？
- ・トルコ語の -ki(n) は属格に接続するときは名詞的、処格に接続するときは名詞的／限定形容詞的に機能し、モンゴル語の -x は属格に接続するときは名詞的、与位格に接続するときは主として限定形容詞的に機能する、とあるが、モンゴル語の -x が与位格に接続するとき、名詞的には機能しないのか？

次に、借用の方向性や通時的起源に関しては、次のような問題点がある。

- ・Luutonen (2011) は古代チュルク語やタタール語の状況を扱ってはいるものの、チュルク諸語全般の記述を広く見ているわけではない。モンゴル諸語の状況については、Janhunen (2003a) が「すべてのモンゴル諸語は *-ki もしくは *-ki/n を持つ」としているが、その検討のプロセスが明確にされた論考は管見の限り見当たらない。借用の方向性や通時的起源の解明のための、両語族の全言語におけ

る細部にわたる通時的および共時的研究の必要性は、Luutonen (2011) 自身も認識している。

・チュルク諸語ではかつては物主形（属格に接続する *-KI*）は存在しなかった。秘史モンゴル語でも物主形（属格に接続する *-KI*）は使われていなかった。現在のトルコ語とモンゴル語の状況を見るだけでも、通時的にかつ細部にわたってまで両語族における *-KI* が「完全な対応物(an exact parallel)」(Janhunen (2003a)) と言えるほどのものなのか疑問である。

・チュルク諸語の **-kin* における *n* の要素は *pronominal n* として説明されるが、他方モンゴル文語の *-kin* の *n* の要素は人間の複数を示す要素として分析されている。表面上の形は確かに一致しているものの、その中身が食い違っている点はどのように説明されるのだろうか。

類型論的な観点からも次のような問題点がある。

・Janhunen (2003a) は *-KI* を二重屈折（の後部）として捉え、Göksel and Kerslake (2005) も屈折とみている。他方、Kullmann and Tserenpil (1996) は屈折でも派生でもないとしている。この要素の位置づけは、膠着的な形態論を持つ言語において、屈折と派生をどのように定義し、またその境界をどのように考えるか、という類型論的に重要な問題の解明にも大きく関わっているものと考えられる。

以上の問題点を解明するためには、共通の調査項目について、より細部にわたる調査・対照を行うことが必要であろう。本稿では話者からの聞き取り調査（2節 調査 I）と両語族の諸言語の記述の検討（3節 調査 II）を行う。

2. 調査 I

（現代）トルコ語と（現代）モンゴル語の *-KI* に関して聞き出しによる調査を行った。

2.1. 調査方法

トルコ語・モンゴル語ともに、（広い意味での）名詞の属格につくもの（2.2.）、処格／与位格につくもの（2.3.）、時の副詞につくもの（2.4.）、処格と属格以外の格につくもの（2.5.）、他の用法（2.6.）、について調査した。コンサルタントの情報 は以下のとおりである。

表 1：コンサルタントの情報

| 言語 | 生年 | 出身地 |
|-------------------------|------|---------|
| トルコ語（以下では略号に [Tr] を用いる） | 1981 | イスタンブール |

| | | |
|--------------------------|------|---------|
| モンゴル語（以下では略号に [Mo] を用いる） | 1991 | ウランバートル |
|--------------------------|------|---------|

2.2. (広い意味での) 名詞の属格につくもの

人称代名詞、指示代名詞、疑問詞、親族名詞、普通名詞（有生・無生（場所的性格を持つもの・持たないもの）、形容詞、のそれぞれにつきうるかをまず調査したが、結果は以下の通り、どれも可能であった。

- ・代名詞：私の・あなたの・彼の・私たちの・あなたたちの・彼らの

[Tr]: benim-ki, senin-ki, onun-ki, bizim-ki, sizin-ki, onların-ki

[Mo]: minij-x, činij-x, ternij-x, bidnij-x, ta naryn-x, ted naryn-x

- ・指示詞：これの・あれの

[Tr]: bunun-ki, onun-ki

[Mo]: enenij-x, ternij-x

- ・疑問詞：誰の・何の・どここの・いつの

[Tr]: kimin-ki, nenin-ki, nerenin-ki, ne zaman-ki

[Mo]: xenij-x, juuny-x, xaana-x-yn-x¹⁰, xezeenij-x

- ・親族名詞：父の・母の・兄弟の／兄の

[Tr]: babanın-ki, annenin-ki, kardeşin-ki

[Mo]: aavyn-x, eežijn-x, axyn-x

- ・普通名詞・有生：男の・女の・子の・アリの／バトの・犬の

[Tr]: adamın-ki, kadının-ki, çocuğun-ki, Ali'nin-ki, köpeğin-ki

[Mo]: zaluugijn-x, büsgüjn-x, xüüxdijn-x, Batyn-x, Noxojn-x

- ・普通名詞・無生（場所的性格を持たないもの）：太陽の・月の・火の・水の・木の・顔の・手の

[Tr]: güneşin-ki, ayın-ki, ateşin-ki, suyun-ki, ağacın-ki, üzün-ki, elin-ki

[Mo]: naryn-x, sarny-x, galyn-x, usnij-x, modny-x, nürenij-x, garyn-x

- ・普通名詞・無生（場所的性格を持つもの）：家の・車の・大学の・会社の・道の・庭の・部屋の・二階の・テーブルの・椅子の・アンカラの／ウランバートルの・東京の・日本の・トルコの／モンゴルの

[Tr]: evin-ki, arabanın-ki, üniversitenin-ki, şirketin-ki, yolun-ki, bahçenin-ki, odanın-ki, ikinci katın-ki, masanın-ki, sandalyenin-ki, Ankara'nın-ki, Tokyo'nun-ki, Japonya'nın-ki, Türkiye'nin-ki

[Mo]: gerij-x, maşiny-x, surguulij-x, aźlyn-x, zamyn-x, xašaany-x, öröönij-x, xojor davxryn-x, šireenij-x, sandlyn-x, Ulaanbaatryn-x, Tokiogijn-x, Japony-x, Mongolyn-x

¹⁰ xaana 「どこ」に -x がつき、これに属格がついてさらに -x のついた形となっている。これは xaana に直接属格をつけることができないためであると考えられる。

・形容詞：大きい、小さい、黒いの、白いの、赤いの、長い、短い

[Tr]: *büyüğün-ki, küçüğün-ki, karanın-ki, beyazın-ki, kırmızının-ki, uzunun-ki, kısanın-ki*

[Mo]: *tomyň-x, žižgijn-x, xaryň-x, cagaany-x, ulaany-x, urtyň-x, boginyň-x*

さらにできあがった語が、名詞的な機能を持つのか、形容詞的な機能を持つのか、もしくは両方の機能を持つのかを調べるために次のような調査を行った。すなわち、トルコ語では *benim-ki şey* 「私のもの」 (*şey* 「もの、こと」), *benim-ki var* 「私がある」 (*var* 「ある」)、モンゴル語では *minij-x jum* 「私のもの」 (*jum* 「もの、こと」), *minij-x end bajna* 「私がある」 (*end* 「ここに」、*bajna* 「ある」) のそれぞれが発話可能であるかどうかを、上記の全ての語に関して訊いた。

トルコ語では *X-GEN-ki şey* は全て不可、*X-GEN-ki var* は全て発話可能、モンゴル語では *X-GEN-x jum* は *jum* を修飾する句とはならず (*jum* は「～(な)のだ」の意の文末小詞として解釈される)、*X-GEN-x end bajna* は全て発話可能、とのことであった。例えば、トルコ語では *benim şey* 「私のもの」、もしくは *benimki* 「私の」は発話可能であるが、**benimki şey* は不可、モンゴル語では *minijx end bajna* 「私がある」は言えるが、*minijx jum* 「私のもの」はその意味では言えない、とされた。

したがって属格に *-ki(n) / -x* が後続した場合、先行研究の記述にあったように、どちらの言語でも名詞的には使えるが形容詞的には使えないことが確認できた。

2.3. 処格／与位格につくもの

これについては、人称代名詞および有生名詞＋処格／与位格、指示代名詞＋処格／与位格、疑問代名詞＋処格／与位格、場所的性格をもつ名詞＋処格／与位格、相対的な場所を示す語＋処格／与位格、絶対的な場所を示す語＋処格／与位格のそれぞれにつきうるかを調査した。

・人称代名詞および有生名詞＋処格／与位格：私での・あなたでの・彼での・私たちでの・あなたたちでの・彼らでの・アリでの・犬での

[Tr]: *bende-ki, sende-ki, onda-ki, bizde-ki, sizde-ki, onlarda-ki, Ali'de-ki, köpekte-ki*

[Mo]: **nada-x'*, **čamda-x'*, **ten de-x*, **biden de-x*, **ta nar ta-x'*, **teden de-x*, **baatar da-x'*, **noxoj da-x'*

モンゴル語では、人称代名詞および有生名詞＋与位格 *-x* は成立せず、もっぱら人称代名詞および有生名詞＋属格 *-x* が使われるという。

・指示代名詞＋処格：ここでの・あそこでの

[Tr]: *burada-ki, orada-ki*

[Mo]: ende-x, tende-x

・疑問代名詞＋処格：誰での・どこでの

[Tr]: kimde-ki, nerede-ki

[Mo]: xendy-x¹¹, *xaandy-x¹²

xendyx は、例えば xendyx n' xamaagüj. 「(それが) 誰のでも かまわない」という意味でなら言える。xend bajx n' xamaagüj. を短くしたような感じである、という。

・場所的性格をもつ名詞＋処格／与位格：家での・車での・大学での・会社での・道での・庭での・部屋での・二階での・テーブルでの・椅子での・アンカラでの／ウランバートルでの・東京での・日本での・トルコでの／モンゴルでの

[Tr]: evde-ki, arabada-ki, üniversitede-ki, şirkette-ki, yolda-ki, bahçede-ki, odada-ki, ikinci katta-ki, masada-ki, sandalyede-ki, Ankara'da-ki, Tokyo'da-ki, Japonya'da-ki, Türkiye'de-ki

[Mo]: gerte-x, maşında-x, surguul'da-x, aşılda-x, zamda-x, xaşanda-x, öröndö-x, xojor davxarda-x, şireende-x, sandalda-x, Ulaanbaatar da-x', Tokio da-x', Japon da-x', Mongol da-x'

・相対的¹³な場所を示す語（＋処格／与位格）：(X の) 前での・(X の) 後ろでの・(X の) 上での・(X の) 下での・(X の) 横での・(X の) 左での・(X の) 右での・北での・南での・東での・西での（なお、モンゴル語では「前＝南」、「後ろ＝北」、「左＝東」、「右＝西」を意味する）

[Tr]: önünde-ki, ardında-ki, üstünde-ki, altında-ki, yanında-ki, solunda-ki, sağında-ki, kuzeyde-ki, güneyde-ki, doğuda-ki, batıda-ki

[Mo]: urda-x, arda-x, deer-x, door-x, *xažuu-x, *züün-x, *baruun-x

モンゴル語で「その横での」、「その左での」、「その右での」の意味を示すには、tal 「側、面」を用いて xažuu talyn-x, züün talyn-x, baruun talyn-x のように言わなければならない¹⁴という。他方、arda-x 「その後ろでの」の代わりに、ard talyn-x と言うこともできるという。

ここにはトルコ語とモンゴル語の違いがはっきりと現れる。すなわち、トルコ語の相対的な場所を示す語が基本的に後ろに格をとり、名詞的な性格を強く示

¹¹ ふつうにつけば xendex/ xen dex という形になりそうであるが、そうはなっていない。この形式に関してはさらに検討する必要がある。

¹² xaana 「どこ」にはそもそも与位格が付かないので xaandy-x が不適格なのはその点に起因すると考えられる。

¹³ 「東西南北」は相対的ではなく、絶対的な方向であるともいえるが、「～の東」のようにやはり基準となる名詞に対する方向や位置を示すことができるので、ここで扱う。ただし、トルコ語でこれら「東西南北」を示す語には所有接辞がついていない点にも注意する必要がある（査読者の御教示による）。

¹⁴ コンサルタントはこのように述べたが、実際にはこれらの語でも与格に -x のつく例はあるという（山田洋平氏の御教示による）。

すのに対し、モンゴル語では相対的な場所を示す語のうち特に「前」、「後ろ」、「上」、「下」のような意味の語は格をとらず後置詞的な性格を強く示す¹⁵。このため *-ki(n)/-x* をつける際にも、トルコ語では処格の後ろにつけるのに対し、モンゴル語では直接につく。

モンゴル語ではさらに *dotor-x* 「(X の) 中での」、*gadna-x* 「(X の) 外での」、*uragši-x* 「～から前へ向かって (ずっと) の」、*xojši-x* 「～から後ろへ向かって (ずっと) の」には *-x* が直接つくという。これに対し、**tojm-x* (<*tojron* 「周囲 (で／に)」)、**gün-x* (<*gün* 「奥、深み」) では直接つかず、属格をつけてからでなければつけられないという。

さらにここでも [Tr] *şey / var*, [Mo] *jum / end baina* を用いて、名詞的用法と形容詞的用法の可否について調べた。トルコ語では全ての形式が名詞的にも形容詞的にも用いられるとされた。他方モンゴル語では、使用できる形式はみな形容詞的用法で用いることができるとされたが、名詞的に用いる場合には、そのままでは使用することができず、3人称の所有人称の小詞 *n'* を伴わなければならないという。山越 (2012: 205) に「基本的には「既知」の対象に対して形容詞が名詞的に用いられます。そのため、形容詞が名詞的に用いられる際には、人称所有小詞をとまなうことが多いといえます。とくに、主語の場合には必ず人称所有小詞をとまないます。」とあることから、モンゴル語における X-与位格-x は形容詞として意識されているものと考えられる。

2.4. 時の名詞／副詞につくもの

下記の語について調査を行った。

・前の・後の・朝の・昼の・夜の・おとといの・昨日の・今日の・明日の・明後日の・

月曜日の・火曜日の・水曜日の・先週の・今週の・来週の・先月の・今月の・来月の・去年の・今年の・来年の・いつもの・昔の・未来の

[Tr]: *önce-ki, sonra-ki, sabah-ki, öğlen-ki, gece-ki, evvel-ki gün-kü, dün-kü, bugün-kü, yarın-ki, öbür gün-kü,*

*pazartesi-ki, salı-ki, çarşamba-ki, geçen hafta-ki, bu hafta-ki, gelecek hafta-ki, geçen ay-ki, bu ay-ki, gelecek ay-ki, geçen yıl-ki, bu yıl-ki, gelecek yıl-ki, her zaman-ki, ??eskiden-ki, *gelecek-ki*

[Mo]: *ömnö-x, daraa-x, öglöönij-x, ödrijn-x, orojn-x, uržigdaryn-x, margaašijn-x, önöödrijn-x, nögöödrijn-x,*

negdexijn-x, xojordoxijn-x, guravdaxijn-x, öngörsön doloo xonogijn-x, ene doloo xonogijn-x, daraa doloo xonogijn-x, öngörsön saryn-x, ene saryn-x, daraa saryn-x,

¹⁵ この問題に関するアルタイ諸言語間での対照は稿を改めて検討する予定である。

öngörsön žilijn-x, ene žilijn-x, daraa žilijn-x, xezeenij-x, deer üeijn-x, ireedüjn-x

ここでも -ki(n)/-x の接続に関して両言語間で次のような違いがあることがわかる。すなわち、トルコ語では時を示す副詞に直接 -ki(n) がつくのに対し、モンゴル語では (ömnöx 「前のもの」, daraax 「後のもの」の2つを除いて) 属格を介してから -x がつく。

この接続の仕方の違いは、機能の違いとも結びついており、たいへん興味深い。やはり名詞的用法と形容詞的用法について調べてみると、トルコ語では使用できる全形式で両方の用法が可能とのことであった。他方モンゴル語では、ömnöx 「前の」, daraax 「後の」のみ形容詞的で、名詞的に使用するときには3人称所有人称小詞 n' を伴わなければならないが、他は逆に名詞的にしか使用できず、jum の修飾はできないとのことであった。つまりモンゴル語では、時を示す語につくか場所を示す語につくかには関わりなく、属格を介して -x がつくものは名詞的に、直接、もしくは与位格を介して -x がつくものは形容詞的に機能することがわかる。

2.5. 処格／与位格と属格以外の格につくもの

トルコ語について、林 (1995: 84, 92, 96) における奪格、与格、道具・共同格それぞれの典型的な例文を参考に、主要部である動詞を名詞化して下記のような例文を用意して訊いてみたが、いずれも用いられないとのことであった(ここでの例文での「」内は意図した意味を示す)。

- *köpür-den-ki geçiş 「橋を通過の渡り」
- *köpek-ten-ki korku 「犬からの恐怖」
- *yağmur-dan-ki duraklama 「雨(が原因)となつての中止」

- *Ali'-ye-ki soru 「アリへの質問」
- *kardeş-e-ki yardım 「弟への手伝い」
- *okul-a-ki yakınlık 「学校への近さ」

- *senin-le-ki görüşme 「あなたとの面会」
- *uçak-la-ki seyahat 「飛行機での旅行」

それぞれ、-ki を用いずに、köpür-den geçiş; Ali'-ye soru, kardeş-e yardım; senin-le görüşme, uçak-la seyahat などの表現を用いることによって意図した意味は実現できる、とのことであった。

念のため、*bura-dan-ki 「ここからの」、*ev-den-ki 「家からの」、*araba-dan-ki 「車からの」、*önün-den-ki 「その前からの」、*bura-ya-ki 「ここにの」、*ev-e-ki 「家への」、*önün-e-ki 「その前への」、*benim-le-ki 「私との」、*bunun-la-ki 「これでの」、などの形を作って確認してみたが、いずれも「用いられない」とのことであった。

次にモンゴル語でも、属格・与位格以外の格に *-x* が後続することの可否を調べた。まず奪格では、*ger-ees-xi*「家からの」、*mašin-aas-xi*「車からの」、*surguul-aas-xi*「学校からの」、*ažlyn-aas-xi*「会社からの」など一連の形の可否を訊いたが、いずれも不可とされた。

**Baatar-aas-xi asuult* 「バータルへの質問」

**noxojn-oos-xi ajx* 「犬からの恐怖」

**boroon-oos-xi bolix* 「雨（が原因）となつての中止」

意図する意味の実現には、それぞれ、*-x* のない形、つまり奪格の形で名詞を修飾する *Baatar-aas asuult* 「バータルへの質問」、*noxojn-oos ajx* 「犬からの恐怖」、*boroon-oos bolix* 「雨による中止」が用いられる¹⁶という。「家からの（持って来るもの）」という意味では、*ger-ijn-x-ees*, *ger-de-x-ees*, *ger-de-x-ijn-x-ees* を用いることができるというが、いずれも家＋属格-*x*＋奪格、家＋与位格-*x*＋奪格、家＋与位格-*x*＋属格-*x*＋奪格、であつて、上記に観察された本来的に可能な形式、すなわち《与位格もしくは属格に *-x* が後続する形式》の範囲内である。

次に具格では、*ongoc-oor-x (n') baina uu?* 「飛行機での {が／は} あるか?」は言えるという。??*ongoc-oor-x yum* 「飛行機でののもの」はかなり変だが、言う人もいるかもしれないとのことであつた。意図する意味でもっともふつうに使われるとされた形式は、与位格に *-x* を用いた *ongocon do-x' ajalal* 「飛行機に（乗つての）旅行」であるという。奪格の場合とは異なり、具格形が直接名詞を修飾する *ongoc-oor ajalal* 「飛行機で旅行」は許容されず、具格名詞の後ろには動詞が後続する必要がある、という内省が得られた。さらに、「きれいだね、どれで書いた?」「これでのがきれいだよ」のような会話であれば、太字下線の部分に *üüg-eer-x n'* のような「これ-具格-*x*（所有人称小辞）」の構成の形式を使うこともできるという。

方向格に関して、例えば *Tokio-ruu-x ajalal* 「東京への旅行」は理解可能で言えるが、少し非文法的な感じがするという。Kullmann and Tserenpil (1996: 105) にある *xürtel*「～に着くまで」に *-x* のつく例 (*Xot xürtel-x xugacaand bid juu č jariagüj*. 「町に着くまでの間、私たちは何も話さなかつた」) に関しては、文法的であると判断された。

共同格では、*nad-taj-x* 「私（斜格語幹）-共同格-*x*」のような形式は用いることができず、共同格の後ろにさらに属格を従えたものに *-x* のついた *nad-taj-n-x* であれば使えるという。使える文脈は例えば、2枚写真があつて「私と一緒に写っているほうの（写真）」を指す場合などであるという。

¹⁶ このうち *noxojn-oos ajx* 「犬からの恐怖」、*boroon-oos bolix* 「雨による中止」は形動詞 (*aj-x*, *boli-x*) による句であり、形動詞はなお動詞的な性格を残していると考えられるので、*ajuul* 「危険」とか *bolilt* 「キャンセル」のような語についても奪格による修飾が可能であるかをさらに検討する必要がある（山田洋平氏からの御教示による）。

以上を総合すると、モンゴル語では属格・与位格以外の格に *-x* がつくことはあまり一般的でなく、特に奪格では全く許容されないことがわかる。他方奪格名詞は直接名詞を修飾することが可能である。この点はトルコ語とも共通しており、他方で日本語とは大きく異なっていて興味深い。

2.6. 他の用法

上記で扱った「属格につくもの」と「処格／与位格につくもの」は、モンゴル語の先行研究である Kullmann and Tserenpil (1996: 101-105) において、それぞれ「所有の Cbs」、「限定の Cbs」と呼ばれていたものであった。これに対し、モンゴル語にはさらに「場所の Cbs」、「集合の Cbs」と呼ばれる用法のものがあることが指摘されていた。これらに相当するものはトルコ語に存在しないのだろうか？ このことを検証するため、モンゴル語の例文を参考に例文を作成し、その使用の可否を問うた。

「場所の Cbs」の例文としてあがっていたモンゴル語の *Manaj bagš-ijn-x end bajna*。「私の先生の(家)はここにある」および *Bi tүүнд ax-yn-x-yg zaaž ögsön*。「私は彼に私の兄の家を見せてあげた」に対応する文として、次のような文が可能であるという。

Ögretmen-im-in-ki burada. 「私の先生の(家)はここにある」

Ben ona ağabey-im-in-ki-ni gösterdim. 「私は彼に私の兄の家を見せてあげた」

「集合の Cbs *-xan*⁴」では、モンゴル語の *Tanaj-xan sajn biz dee*。「あなたがた(の家族)は元気ですよね？」および *Tednij bajr-ny-xan ix xөгziltej*。「彼らの宿舎の者たちはとても元気がいい」に対応する文として次の文が可能であるという。

Sizin-ki-ler iyi mi? 「あなたがた(の家族)は元気ですよね？」

On-lar-in-ki-ler iyi mi? 「彼らのところの者たちは元気ですか？」(ただし処格について **On-lar-da-ki-ler iyi mi?* は非文と判断された)

コンサルタントによれば、*bizim-ki-ler* と *sizin-ki-ler* は「家族」の意味でよく使われるという。

他方、モンゴル語の *Manajxan margaaš xičeel xijxgүj*。「私たちは明日授業がない」に形式的には対応すると考えて作成した次の文は受け入れられなかった。

**Bizim-ki-ler yarın dersimiz yok*. 「私たちは明日授業がない。」

意図する意味に対応する文としては、*Bizim yarın dersimiz yok*。「私たちの明日の授業はない」(属格の *bizim* 「私たちの」による表現) が用いられるという。

さらに *-ki* や *-x* が二度使われる形式が可能かどうかについて調査した。トルコ語では「X-処格-ki-複数-属格-ki」の *ev-de-ki-ler-in-ki* 「家にあるものの(もの)」、「X-所有人称-属格-ki-処格-ki」の *anne-m-in-ki-n-de-ki* 「母のもののあるもの」のいずれも使用可能で、形容詞用法はないが名詞的用法はあるとい

う。

モンゴル語では「X-属格-x-与位格-x-奪格」の *ger-ijn-x-d-e¹⁷-x-ees* 「家にあるものから」、 「X-属格-x-与位格-x」の *eež-ijn-x-d-e-x* 「お母さんの家にあるもの」が使用可能であるという。

ger-ijn-x-de-x-ees *avaad ir.* 「家にあるものから持ってきて。」

いずれも名詞的に用いられることがわかる。

3. 調査 II

不十分ではあるが、両語族のいくつかの言語について *-KI* の形式面もしくは機能面における対応形式に関する記述を収集することにした。

3.1. チュルク諸語

庄垣内 (1989: 937) はチュルク諸語を以下の6つのグループに分けている: I. サハ語、II. 北グループ (トゥヴァ・ハカス語群)、III. 北西・中央グループ (キプチャク語群)、IV. 東グループ (チャガタイ語群)、V. 南西グループ (オグズ語群)、VI. チュヴァシ語。

本稿では II. 北グループよりトゥバ語、III. 北西・中央グループよりカザフ語、IV. 東グループよりウズベク語を選んだ。さらにトルコ語からは遠く東に位置し、系統的な位置づけが難しいとされている中国領内のサリグ・ヨグル語 (西部裕固語) およびサラル語についても記述を参照した。これらの言語の状況を I. サハ語、VI. チュヴァシ語のそれとともに (V. 南西グループの) トルコ語での状況と比較・対照してみることにした。

3.1.1. サハ語

江畑 (2005: 28-30) によれば、*-KI* (多くの異形態があるが、ここでは触れない、以下の具体例のサハ語の形式についても、江畑 (2005: 30-31) を参照された)、代表形としてここでは小型英大文字の *-KI* で示すことにする) は以下のような意味の43の時間/空間を表わす名詞¹⁸につく例が見出されたという: [日・年] 今日、明日、明後日、昨日、一昨日、今年、来年、去年; [季節] 春、夏、秋、冬; [一日の中の時間帯] 朝、昼、晩、夜、ゆうべ; [方角] 前/東、南、西、北; [位置関係] 上、下、前、後、上方、下方、真中、向こう、こっち、反対側; [順序・前後関係] 遅い、早い、最初; [その他時間を表わすもの] 今(1)、今(2)、さっき、いつ、今(3)、最近、昔、将来、以前。トルコ語と大きく異なるのは、この *-KI* が位置関係を示す語にも直接接続した形になっていることである。サハ語は歴史的に属格を失ったと考えられるため現在属格を持たないが、古くからこの

¹⁷ この *-A* は挿入母音と考えられている。

¹⁸ 固有語のみで、複合語の例もないという (江畑 (2006: 28))。なおサハ語の表記に関しては江畑 (2012: 7-8) に倣った。

接辞を継承しているのであれば、位置関係を示す語に **-KI** がついた語形は属格の痕跡を持っていてもおかしくないはずだが、それもない。他方、**yrdy-ky**「上の」(< **ryt**「上」)、**annu-ku**「下の」(< **alun**「下」)、**inni-ki**「前の」(< **ilin**「前」)、**kenni-ki**「後ろの」(< **kelin**「後ろ」)の4形式は語幹を大きく変えた形を示すが、これらは3人称単数の所有接辞がついた形に由来するとしている：**yrd-y-ky** etc. (江畑 (2005: 31)。この接辞による派生語は連体修飾的機能と名詞的機能の両方を示すという(江畑 p.c.)。

江畑 (2005: 33-35) によれば、さらに、おそらくトルコ語などの [処格-KI] に対応する形式であると思われる接辞 **-TEEKI** が存在し、固有語のみならず借用語や固有名詞などにもつく。名詞的な機能とともに連体修飾の機能を持つという。これがつく名詞は、a) 時間を表わす名詞、b) 地名を表す固有名詞、c) 指示代名詞 (**bu**「これ、この」、**ol**「あれ、あの」、**xan-**「どこ」)、d) 位置関係を表す名詞、e) 「トコロ性」を持つ名詞、であるという。

江畑 (2006: 61) によれば、「～のもの」を示す物主代名詞は **miene**「私のもの」、**ejiene**「あなたのもの」、**kiniene**「彼(女)のもの」、**bihene**「私たちのもの」、**ehiene**「あなたたちのもの」、**kiniler kiennere**「彼(女)らのもの」となるという。格変化する場合、「3人称の「所有型」の格変化を」するという(すなわち、**pronominal n** の痕跡がある)。一般名詞につく接辞としては存在せず、上記の **kiene**「～のもの」を一般名詞に後続させて表現するという。

3.1.2. トゥバ語¹⁹

高島 (2008: 67-68, 71-72) によれば、時間的關係に関する事物の特徴をあらわす生産的接辞 **-kuu / -ki / -ku / -ky / -guu / -gi / -gu / -gy** がある (**kuuš-kuu**「冬の」、**dyyn-gy**「昨日の」)。さらに位格 **-da** (これにも異形態がある) および **-guu** から形成されている **-daguu / -dakuu / -degi / deki / -taguu / -takuu / -tegi / -teki** という時間的關係や、場所に関する現象、人の特徴をあらわす生産的接辞があるという (**šaan-daguu**「過去の、昔の」、**xœl-deki**「湖にある」)。物主形は **-nuuu⁴ / -tuuu⁴ / -duuu⁴** (**x⁴** は母音調和による異形態のあることを示す) で **pronominal n** をとる。物主代名詞は **mæŋji**「私のもの」、**sæŋji**「あなたのもの」、**ooŋuu**「彼(女)のもの」、**bistii**「私たちのもの」、**silernii**「あなたたちのもの」、**olarnuuu**「彼(女)らのもの」となるという。

さらにトゥバ語に関しては、江畑冬生氏が氏の手元で使用可能なコーパスから検索して問題の接辞の生産性を調べてくださった。結果として得られた例は以下の通りであったという：**ortaa-kī**「真ん中の」、**aldī-ī**「下の」、**adak-kī**「下部の、下流の」、**üstü-kü**「～の上の」、**irak-kī**「遠くの」、**čook-ku**「近くの」、**bögün-gü**「今日の」、**xoyut-ku**「遅くの」、**xündüs-kü**「日中の」、**kežee-ki**「晩の」、**düne-ki**「昨日

¹⁹ 表記は上記サハ語のものに準ずる。

の], daarta-gi「明日の」, erten-gi「明日の」, čas-ki「春の」, čay-gi「夏の」, küš-kü「秋の」, kiš-ki「冬の」, am-gi「今の」, baštay-gi「最初の」, burun-gu「前の」, murnu-ku「～の前の」, songaar-gi「後の」, soo-gu「～の後の」, sööl-gü「最新の」, 最後の」, bo čil-gi「今年の」, bir-gi「1番目の」, iyi-gi「2番目の」, üš-kü「3番目の」, dört-kü「4番目の」, beš-ki「5番目の」, aldī-gi「6番目の」, čedi-gi「7番目の」, ses-ki「8番目の」, tos-ku「9番目の」, on-gu「10番目の」, čeerbi-gi「20番目の」, čüs-kü「100番目の」。時間を示す語からの派生が多くを占めているが、場所を示す語からの直接の派生も観察される。

3.1.3. カザフ語²⁰

以下は中嶋 (2004: 43, 65-66) による。時間や空間と関係する語に付加される -qə/-kə/-gi/-ki「～の」がある (kəktəm-gi「春の」, kefe-gi「昨日の」, iŋ-ki「内部の」, endi-gi「次の」, alda-gi「前の」)。位格にこの -qə / -kə / -gi / -ki が付加された -daɣə / -degi / -taɣə / -tegi「～における」があり (kala-daɣə「都市の」, mektep-tegi「学校の」, ʊj-degi「家の」)、これは完了形動詞にも付加される (esik kaɣəl-kan-daɣə dauəs「ドアがノックされた時の音」)。「～のもの」を示す物主代名詞は -niki/-diki を付加することによって作られる (me-niki「私のもの」, o-niki「彼(女)のもの」, mənə-niki「この人のもの」)。

なお Luutonen (2011: 24-28) では同じく III. 北西・中央グループのタタール語を扱っているが、これはやはりタタール語がカザフ語とよく似た状況であることを示している。

3.1.4. ウズベク語

以下は Kononov (1960: 149-150) による (表記はラテン文字正書法に変えた)。
-gi/-qi/-ki があり、これは一定の期間か場所の語幹につき形容詞を形成する (kuz-gi「秋の」, bugun-gi「今日の」, ich-ki「内側の」)。さらに副詞や句につく例もある (keyin-gi「以後の」, urushdan burun-gi「戦争の後で」)。
-dagi は処格に -gi / -qi / -ki がついたもので、場所や時間の名詞につき、場所の形容詞を形成する (uy-dagi「家にあるもの」, tun-dagi「夜にあるもの」)。ただし場所以外の名詞についた場合に、より一般的な性質を示すこともできる (ikki tonna ogirlik-dagi tosh「2トンの重さの石」, qirq joshlar-dagi kishi「40歳代の人」)。
-niki は属対格に -gi/-qi/-ki のついたもので、人称代名詞および (所有人称を伴うこともある) 普通名詞、固有名詞について物主形を形成する (men-niki「私のもの」, otam-niki「私の父のもの」)。

²⁰ 表記には中嶋 (2004: 2) の音価としてあげられている発音記号ベースのものをを用いた。

3.1.5. チュヴァシ語

以下は Luutonen (2011: 35-43, 67-68, 88-90) の記述によった。Luutonen (2011) は、-i, - χ i, -sker という3つの接辞を扱っている。

まず -i は処格（異形態 -ta / -te / -ra / -re / -če を持ち、-i が接続すると互いに融合して -ti, -ri, -či の形となる）をとった名詞、代名詞、後置詞、副詞、および -Alla（与対格 (n)A+方向の接辞 -lA からなる）に接続する。-i は接続するホストの末尾に子音の gemination を引き起こす。研究者によってはこの -i を3人称の所有人称接辞 - \check{e} /i の縮約とみている。Luutonen (2011: 62) は、少なくとも処格における -i は下記の - χ i の異形態であり、他のチュルク諸語の -KI と同源であるとみている。名詞句をスコープにできるという (pir \check{e} n sad-r-i yiv \check{a} s-sem 「私たちの庭の木々」)。

- χ i は時間を示す語／句から時間を示す形容詞(句)を形成する (k \check{e} r- χ i「秋の」、pil \check{e} k sul- χ i「五歳の」、payan- χ i「今日の」)。- χ i は *-KI に由来する。-i, - χ i の両者とも、格変化をする際にはいわゆる pronominal n をとる。

-sker は典型的には他の名詞と同格に置かれた形容詞もしくは形動詞について、その典型的な対象を示す (sukk \check{a} r-sker 「盲目の者」、la \check{s} i, ti \check{x} a-sker 「その馬、(1歳に満たない)仔馬」)。代名詞にも接続する。この語は明らかに比較的最近に \check{u} sker 「もの、こと」から発展したものがその起源であるという。

いわゆる物主代名詞は man- \check{a} nn-i (I-GEN+GEMINATE-3POSS) 「私のもの」、 \check{s} in- \check{a} nn-i (人-GEN+GEMINATE-3POSS) 「人のもの」のように形成される。Luutonen (2011: 40-41) はこれを属格に -KI の後続したものとみている。

-i と -sker は種々の形動詞の形につくこともできるという。

| | | | |
|----------------|------------------------|------|--------------------------------------|
| \check{s} in | kil-n-i-ne | epir | kure-t- \check{a} m \check{a} r. |
| person | come-PST-3POSS-DAT/ACC | we | see-PST-1PL |

-i, - χ i, -sker の三者とも格を後続させたり、主語／目的語／述語になり得る上、連体修飾語になることができる。

3.1.6. サリグ・ヨグル語

鐘 (2007: 88) は時間を意味する名詞や副詞について形容詞を形成する接辞として - \check{g} i / - \check{g} i をあげている (yaz- \check{g} i「春の」、da \check{n} Gar- \check{g} i「朝の」、halda- \check{g} i「たった今の」)。同じく鐘 (2007: 117) によれば、物主形は属格に - \check{g} i を接続して形成するという (me-ni \check{n} - \check{g} i「私のもの」、se-ni \check{n} - \check{g} i「おまえのもの」、m \check{i} la-ni \check{n} - \check{g} i「子供のもの」、 \check{g} iz-di \check{n} - \check{g} i「娘のもの」)。

3.1.7. サラル語

林 (1985: 45) によれば、時間名詞につく要素に - \check{g} i / - \check{g} \check{e} / - \check{y} i があり、(buyun- \check{g} i「今日の」、bili- \check{y} i「今年の」) 他方、一部の時間を示す語や季節を示す語には、-ngi/-ingi/-ing \check{e} がつくという (eddisi-ngi「明日の」、jaz-ingi「春の」)。場所を示し

うる語につく要素に *-daɣə* / *-diyi* があり、これは 3 人称所有接辞の後ろにつくときには *-ndaɣə*/*-ndiyi* として現れる (*dal-daɣə* ~ *dal-diyi* 「木の上にある」、*daɣ-daɣə* ~ *daɣ-diyi* 「山の上にある」、*udɣ-i-ndaɣə* ~ *udɣ-i-ndiyi* 「彼の手の上にある」)。物主代名詞には *miniyi* 「私のもの」、*siniyi* 「あなたのもの」、*ainiyi* 「彼(女)のもの」があがっている(林(1985: 51))が、属格の形式も *-niyi* であるという(林(1985: 37))。

3.2. モンゴル諸語

モンゴル諸語は 10 ほどの言語からなるが、ここでは特にモンゴル語からかけ離れた言語特徴を有する²¹とみなされる孤立的諸言語、特にシロンゴル・モンゴル語と呼ばれてまとめられている保安語、東郷語、土族語、東部裕固語(シラ・ユグル語)の 4 言語について詳しく見ることにする。

まずこれらの言語の派生接辞に特化してまとめた塩谷(1991: 168)の *-KI* に関する記述を参照し、しかる後に筆者自身もその原典の文法における言及個所の記述を収集し示すことにする。

塩谷(1991: 168)ではモンゴル文語 *-ki*/*-kin* を関係形容詞・所属名詞形成の接辞と呼び、形式もしくは機能の面に対応すると考えられる形式を言語ごとに次のように示している。

・保安語 関係形容詞: *-gu*/所属名詞: *-caŋ* (年都呼方言) *-gə* (大墩方言)

関係形容詞の例: *eməla* 「前」 > *eməla-gu* 「前の」; *ʂgudə* 「昨日」 > *ʂgudə-gu* 「昨日の」

所属名詞の例: (年都呼方言) *mənə* 「私の(属格)」 > *mən-caŋ*; 「私の(人/物)(所属名詞)」; *kaŋ* 「誰」 > *kaŋ-caŋ* 「誰の(物)(所属名詞)」; (大墩) *mənə* 「私の(属格)」 > *mən-gə*; 「私の(人/物)(所属名詞)」; *abo* 「お父さん」 > *abo-gə* 「お父さんの(所属名詞)」

・東郷語 関係形容詞: *-ku*/所属名詞: *-kuŋ*

関係形容詞の例: *fudzuɣudu* 「昨日」 > *fudzuɣudu-ku* 「昨日の」; *maɣaʂi* 「明日」 > *maɣaʂi-ku* 「明日の」

所属名詞の例: *mini* 「私の(属格)」 > *minu-kuŋ* 「私の(所属名詞)」; *həlani* 「彼らの(属格)」 > *həlani-kuŋ* 「彼らの(所属名詞)」

・土族語: *-gu*

例: *nde*: 「ここ」 > *nde-gu* 「この」; *turo* 「中」 > *turo-gu* 「中の」

・東部裕固語: *-cə*, *-kə*

例: *dunda* 「中間」 > *dunda-cə* 「中間の」; *ʃogdor* 「昨日」 > *ʃogdor-kə* 「昨日の」; *ende* 「ここ」 > *ende-kə* 「この」

²¹ 栗林(1992: 519)による。

3.2.1. 保安語

陳 (1987: 188) では時位詞に *-gu* のつく例として、*eməla-gu* 「前-gu」、*də:r-gu* 「下の」、*Gada-gu* 「外-gu」の例をあげている。用法はいずれも連体修飾用法である。Wu Hugjiltu (2003: 331) には場所の格の諸形式からの名詞化の接辞として *-gu* (例: *xar-da-gu* (手-DAT-gu) 「手にあるもの」) があがっている。陳他 (編) (1986: 5, 9, 12, 22, 27) には *-gu* の例を 5 例見つけることができた: *endə-gu* 「ここでの」(2 例), *nda:neŋ-gu* 「去年の」, *χi:ta jaŋ-gu* 「次の何の」, *nudə-gu* 「今日の」。用法はいずれも連体修飾用法である。Wu Hugjiltu (2003: 337) には属格の語幹に *-ghang* (<*-ki/n) がつき、名詞述語として働く代名詞の形式があがっている (*cen-e-ghang* <*-cin-U-ki/n 「おまえの (もの)」)。陳他 (編) (1986: 5) にもこの形式の例文が見出される。

3.2.2. 東郷語

布和 (1986: 104) に親族名称もしくは固有名詞の属対格に *-kuŋ* のついた例が 2 例示されている (コピュラ文の補語の例と、連合格をとった例で、いずれも名詞的用法である)。Kim (2003: 352) には場所的な意味を持つ語にモンゴル諸語に共通な名詞化接辞 *-ghun* (<*-ki/n) のつく例として、*soghei-ghun* (左-ghun) 「左側にあるもの」、および属格にこの接辞のついた例として *gie-ni-ghun* (家-GEN-ghun) 「家にある物/いる者」があがっている。布和他 (編) (1986: 3, 5) には *-kuŋ* の例が 6 例見いだされた: *minu-kuŋ* 「私のもの」(3 例)、*tšinu-kuŋ* 「おまえのもの」(2 例)、*gaganu-kuŋ* 「兄のもの」。用法はいずれも名詞用法である。同じく布和他 (編) (1986: 27) には *-ku* の例もある: *ənə xoŋ-ku* 「今年の」。用法は連体修飾用法である。なお生産的でないが、与位格-*KI* が存在する (布和他 (編) (1986: 331))。

3.2.3. 土族語

清格尔泰 他 (編) (1986: 19, 23) には、*niudur-gu* 「今日の」(2 例)、*teiudur-gu* 「昨日の」(2 例)、*malaŋ-gu* 「明日の」、*ndəre:-gu* 「この」のような例が見出される。用法は連体修飾用法である。与位格についた連体修飾用法の例 (清格尔泰 (1991: 161))、文語の *deger-e* が文法化して格となったものについた連体修飾用法の例 (清格尔泰 (1991: 168)) が見出される。他方、人称代名詞の属対格 (*-nə* etc.) にさらに属対格がつき物主代名詞として機能している例 (清格尔泰 (1991: 171)) がある。他方、1・2 人称代名詞では単なる属対格形 (2 人称代名詞では主格形も) に再帰接辞がついて、目的語の名詞として機能している例がある (清格尔泰 (1991: 193, 195))。清格尔泰 他 (編) (1986: 5) には、次の例がある。

ne nəge əuaŋ xam munə da puca,
 この 一 足の 靴は 私の でも ない、
 nda:nə avunə da puca.

私の 兄の でも ない。

さらに共同格+gu が存在する（角道先生の御教示による）。

民話方言に関しては、属対格に -gə のついた 2 例（属対格および奪格をとって名詞的に機能している）があがっている（清格尔泰 (1991: 172)）。Zhu Yongzhong et al. (eds.) (2005: 149) には与位格-KI の例がある。

3. 2. 4. 東部裕固語

保朝魯・賈拉森 (1991: 220) に -gə / -kə / -qə のついた一連の時位詞があがっている (ølmə-kə 「東-kə」、di:re-kə 「上-kə」、du:ra-qə 「下-qə」、dunda-Gə 「中-Gə」、ki:re:-kə 「外-kə」、Gadana-qə 「外-qə」、htərə-kə 「内-kə」、htənə-kə 「内-kə」、na:na-kə 「ここ-kə」、ʃa:na-kə 「そこ-kə」、xwa:r-kə 「前-kə」)。同じく保朝魯・賈拉森 (1991: 222) にある例文で du:ru-qə 「下-qə」の例は連体修飾的に機能している。保朝魯・賈拉森 (編) (1988: 6, 20, 25) には、ende-kə 「ここの」、ondor-kə 「今日の」、ʃogdor-kə 「昨日の」のような例が見出される。

他方、保朝魯・賈拉森 (1991: 155) には述語となり陳述語気詞を伴った場合には、属対格の名詞がそのままの形で「ある人物・事物に属する具体的な事物」を指すとしている：ene munə ʃai. (これ 1SG.GEN/ACC いる) 「これは私のだ」、ene maan xən-iin bai. (これ 肉 羊-GEN/ACC いる) 「この肉は羊のだ」。保朝魯・賈拉森 (編) (1988: 5) にも具体例がある。

4. 調査結果のまとめと考察

調査 I と調査 II の結果を整理し、-KI の位置づけの類型論的検討も行う。

4. 1. 調査 I から得られた知見

2 節であげた先行研究の問題点をふまえ、調査結果を示し、若干考察を加える。

1. 接続とその仕方に関する調査結果

①トルコ語では時を示す副詞に直接 -ki がつくのに対し、モンゴル語では (ömnöx 「前のもの」、daraax 「後のもの」の 2 つを除いて) 属格を介してから -x がつく。この接続の仕方の違いは、機能の違いとも結びついている。

②相対的な場所を示す語に関して、トルコ語では常に (所有接辞と) 処格をとってから -ki(n) をつけるのに対し、モンゴル語では後ろに格をとらないより後置詞的な語に限って直接 -x がつく。より名詞的な語でも、与位格でなく、tal 「側、面」などで名詞化してから属格をとり、これに -x がつく。この違いは、一面ではトルコ語における相対的場所を示す語が必ず後ろに格をとり、名詞的に使われることに起因している。

③両言語において奪格に -ki(n)/-x は接続しない。どちらの言語でも奪格名詞は直接名詞を連体修飾できる (この点で日本語とは大きく異なる)。他方、モンゴ

ル語では、先行研究の指摘の他に、具格でもある程度は *-x* をとることが可能である。

2. できあがった語／句の機能に関する調査結果

①トルコ語における属格に *-ki(n)* の接続した形式は、文脈によってモノばかりでなく、場所や人間の集団も指すことが可能である。このため、モンゴル語で「場所の CbS」および「集合の CbS *-xAn*」と呼ばれていた用法の少なくとも一部の例はトルコ語でも成立する。特に複数接辞を従えた *bizim-ki-ler* と *sizin-ki-ler* は「家族」の意味でよく使われるという。モンゴル語の「集合の CbS *-xAn*」の用法において、*-xAn* の *n* の要素が人間の複数を示す機能を保っていることと併せて興味深い。

②トルコ語の *-ki(n)* が処格に接続するときは名詞的／限定形容詞的に機能するのと同様に、モンゴル語の *-x* も与位格に接続するときに限定形容詞的のみならず名詞的にも機能し得る。ただし、(今回の調査は主語として機能する場合であったのだが、この場合に) 他の一般の形容詞と同様に 3 人称の人称小辞 *n'* を必要とする。この点で基本的にはやはり限定形容詞的な機能がその中心であるといえる。

全体的にみて、トルコ語では時間を示す語が直接 *-ki(n)* をとるのに対し、モンゴル語では相対的場所を示す語が直接 *-x* をとる点がもっとも大きな違いであろう。相対的場所を示す語はトルコ語ではかなり名詞的にふるまうのに対し、モンゴル語では語によるが、より後置詞的であり、後者の違いはこの点から説明できる。他方、時間を示す語に直接つくか、属格を介するかの違いは、次に見るように歴史的原因によるものと思われる。

4.2. 調査 II から得られた知見

①個別言語の記述が十分でない、②筆者が十分に記述個所を見つけられていない、③各言語に対する筆者の知識が不十分である、などの理由から、おそらくかなり不十分であるだろうが、記述から得られた状況を整理すると下記のようなだろう。

表 2 : チュルク諸語における *-KI* に関する記述の異同

| | 処格-KI | | -KI | | | -KI でない 物主形の形 |
|--|-------|----------------|-------|--------------------------|-----------------|------------------|
| | 句につく | 処格-KI の 一体化 | 時間につく | 相対的場所 ¹ に直接つく | 物主形の -GEN-KI | |
| | | | | | | |

¹ 正確には、所有接辞の後である (査読者の御教示による)。

| | | | | | | |
|-----------------------|----|-----------------|--------|----|---------|--------------------|
| 古代チュルク | ○ | × | × | ○ | × | =GEN |
| チュウ ^ゝ アシュ | ○ | -ti | ○(-χi) | × | ○(-änn) | — |
| サハ | ○ | -TEEBI | × | ○ | × | -ene |
| サラル | ×? | -dakə/- diyi | ○? | ×? | × | =GEN(-niyi) |
| サリグ ^ゝ ・ヨグル | ×? | ?? | ○? | ×? | ○ | — |
| トウハ ^ゝ | ○ | -daguu | × | ○ | × | -nuuu ⁴ |
| ウス ^ゝ ベク | ○ | × | × | ○ | × | -niki |
| カザフ | ○ | × | × | ○ | × | -niki |
| トルコ | ○ | × | ○ | × | ○ | — |

表 3：モンゴル諸語における *-KI* に関する記述の異同（△は非生産的なもの）

| | 形式 | 与位格-KI | 時間にもつく | 物主形の GEN-KI | -KI でない 物主形の形 |
|----------------------|-------------------|--------|--------|----------------|------------------|
| モンゴ ^ゝ ル | -ki(n) | ○ | × | ○ | — |
| 保安 | -gu, -caŋ | ○ | ○ | ○ | — |
| 東郷 | -ku, -kuŋ | △ | ○ | ○ | — |
| 土族 互助 | -gu | ○ | ○ | × | =GEN |
| 土族 民和 | -gə | ○ | ?? | ○ | — |
| 東部裕固 | -kə, -cə | ?? | ○ | × | =GEN |
| 秘史モンゴ ^ゝ ル | =ki(n), - u'Äi | ○ | ×? | × | -GEN-'äi |

表 2 の左側の列より順にみていく。サラル、サリグ・ヨグルの 2 言語では、時間名詞につく派生接辞としての面を強く示し、（特に形動詞などからなる）句に処格を介してつく用法があるのか不明である。サラルでは、他方で処格との結びつきが強く、分ち難い 1 つの接辞となっているかのように記述されている。サラルとサリグ・ヨグルでは、*-KI* はもっぱら時間を意味する名詞にのみつくかのように記述されている。これに対し、ウズベク語やカザフ語はトルコ語や古代チュルク語に比較的近い特徴を示す。ただし相対的な場所を示す語に *-KI* が直接につく、という点でトルコ語とは異なりを見せる。物主形は多くの言語でトルコ語のような属格に *-KI* が後続する形をとらず、*-niki* もしくはこれから *k* の脱落したような形を示す。菅原 (2014) で論じられているが、この形は古代チュルク語で支配的であった対格形の斜格語幹に *-KI* のついたものであろう。この形のほうがより古い形式を保持しているものと考えたいが、その場合サリグ・ヨグル語の形が大きな問題となる。

どの言語でもさらなる曲用に際して pronominal n が現れるので、*-KI* が人称

所有接辞を語源としているという Luutonen (2011) が 3 つ目に挙げた仮説が正しいものと思われる (1.3.4. 節参照)。

チュヴァシ語の *-i* は *-ki* に遡るとする Luutonen (2011) の説には、筆者は同意しがたい。*-xi* がその対応形であることは疑いなく、もし *-i* と *-xi* に分裂したのなら何らかの条件がないと比較言語学の原則に合わない。遠くチュヴァシ語とサラル語において、もっぱら時間を意味する語につくようであることから、筆者はもともとチュルク祖語におけるこの祖形は、やはり時間名詞を形容詞化する派生接辞であったと考えたい (古代チュルク語は問題として残る)。その後、類推から処格のついた語を形容詞化する用法が発達し、モンゴル諸語にも古い段階で影響を与えたものとする。ただ先行研究の問題点であげた *-ki(n)* における *n* の要素の両語族における食い違いはなお説明できていない。

モンゴル諸語の記述において注目すべき点は、保安、東郷、土族 互助、東部裕固の各言語において、時間を示す語に直接 *-KI* のついた語例があがっている点である。これらシロンゴル・モンゴル諸語は、語末の音節にアクセントが来るなど、チュルク諸語の影響を受けた可能性が指摘されている (栗林 (1989: 279))。筆者はしたがってこれをチュルク諸語からの影響によって生じたものと考えたい。

総じて今回のデータによって通時的変遷を明らかにしようとするのは時期尚早であるかもしれない。今回の調査結果を足掛かりに、今後はさらに全言語のより精密な検討を行ってその実状を明らかにしていく必要がある。

4.3. 類型論的観点からの考察 — 屈折か派生か —

ここでは (現代) トルコ語と (現代) モンゴル語の *-KI* について、これを共時的に屈折とみるか派生とみるか、接辞とみるか付属語とみるか、について類型論的な観点からも考察を加えることにする。

トルコ語では語末にアクセントがくるので、これを音韻的語を定義する際の基準とすることができる。*-ki(n)* はアクセントをもつので、音韻的な語の語末要素であり、その点からは付属語ではないと考えることができる。他方、母音調和も基準となるが、*-ki(n)* はわずかな語でしか母音調和の異形態を示さないので、この点からは屈折接辞と見なすのに問題がある。他方、モンゴル語の場合、*i* は中性母音であるため、こうした議論はできない。

Haspelmath and Sims (2010: 90) は、"A list of properties of inflection and derivation" として 11 の基準をあげている。これに照らして *-KI* を検討してみると次のような結果となる。

表 4 : Haspelmath and Sims (2010: 90) のあげる 11 の特徴からみた *-KI*

| Inflection | Derivation | <i>-KI</i> |
|---------------------------------------|------------------------------------|------------|
| (i) relevant to the syntax | not relevant to the syntax | D |
| (ii) obligatory expression of feature | not obligatory expression | D |
| (iii) unlimited applicability | possibly limited applicability | D |
| (iv) same concept as base | new concept | D |
| (v) relatively abstract meaning | relatively concrete meaning | D |
| (vi) compositional meaning | possibly non-compositional meaning | D |
| (vii) expression at word periphery | expression close to the base | I |
| (viii) less base allomorphy | more base allomorphy | (I) |
| (ix) no change of word-class | sometimes changes word-class | D |
| (x) cumulative expression possible | no cumulative expression | D |
| (xi) not iterable | possibly iterable | I? D? |

以下に上記の判断の理由を示す。

(i)(ii) について、*-KI* による表現は関係節など他の迂言的表現によって置き換えうる。ある特定の品詞類にとって必須の語形変化であるとは言えない。むしろ *-KI* のついた語（特に属格に後続した場合）は文中で機能するために一定の曲用を必要とする。(iii) について、*-KI* は意味的に限られた範囲の語にしかつかない。(iv)(v)(vi) について、物主形は「～のもの」という新しい概念を実現し、処格／与位格につく *-KI* も単に統語的性格を変えるだけでなく、文脈によってモノや人の集団、～製の、といった単純に予想できない意味を付け加える。(vii) について、語幹に近いどころではなく、屈折接辞の外につく。ただしさらにその外にも屈折接辞をとる。(viii) について、特に語幹の形に影響を与えない、ただし膠着的なこれらの言語にあって語幹の形に影響を与える接辞等の要素はそもそもあまり存在しない。(ix) について、処格／与位格につく *-KI* はまさにその品詞的・統語的性格を転換する。(xi) について、連続して用いることはできないが、一つの表現の内部で繰り返し用いることができる。

このようにほとんどの基準が派生としての性質を示すが、最も問題となるのは (vii) に関してであろう。これは *-KI* が接辞ではなく、付属語であるとするれば問題はなくなる。服部 (1950) によれば、職能の違ういろいろな語に接続できるものは付属語ということになる。属格に後続する *-KI* と処格／与位格に後続する *-KI* のいずれも、名詞、形容詞、動詞、後置詞、副詞、とさまざまな品詞につくことはすでにみたとおりである。句にかかる広いスコープを持っていることも付属語であるとするればより整合的である。

結論として、本稿では *-KI* は派生を行う付属語であるとみなすことを提案す

る。

5. 今後の課題

調査 I に関して、聞き出し調査のコンサルタントはいずれの言語も 1 名のみであり、調査結果には個人差が出ていることも考えられる。名詞的機能や限定形容詞的な機能に関して、ごく簡単なテストを行ったのみである。今後はコーパス調査などによって、頻度の高い構造を明らかにし、その理由を考えていくことが必要だろう。調査 II に関しては、すでに述べたようにさらに問題は多い。これを出発点として今後研究を進めていきたいと考えている。

謝辞

聞き出しにに応じていただき、貴重な文例のデータを作例したり、文の適格性を判断して下さったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。菱山湧人氏と山田洋平氏からはコンサルタントに訊く例文の下準備や文献に関する御教示をいただいた。菱山氏と山田氏、さらに江畑冬生氏と梅谷博之氏には本稿の内容に関して多くのコメントやアドバイスをいただいた。東郷語と土族語に関して、角道正佳先生より貴重な情報をいただいた。覆面の査読の先生からも的確で貴重な御指摘を多くいただくことができた。ここに記して感謝申し上げたい。ただし本稿における誤謬は全て筆者に帰するものである。

故庄垣内正弘先生には、筆者が鳥取大学に勤めていた時代にナーナイ語のテキストをお送りしたところ、テキストを出すことの価値を説かれ、今後もこうした仕事を続けていくようにと、励ましていただいたことがある。当時は駆け出しであったこともあり、たいへん励みになったことを今も深く感謝している。庄垣内先生の追悼号に寄稿できることに感謝し、まことに拙い論考ではあるが、本稿をもって先生への一つのお礼とさせていただきますと思う。

略号一覧

| | |
|------------------------------|----------------------|
| ABL: ablative 奪格 | INS: instrumental 具格 |
| ACC: accusative 対格 | LOC: locative 処格 |
| COM: comitative 共同格 | PL: plural 複数 |
| DAT: dative 与格 | POSS: possessive 所有 |
| DAT-LOC: dative-locative 与位格 | PST: past 過去 |
| DIR: directive 方向格 | SG: singular 単数 |
| GEN: genitive 属格 | |

参考文献

- 保朝魯・賈拉森 (1991) 『東部裕固語和蒙古語』 蒙古語族方言研究叢書 016. 呼和浩特: 內蒙古人民出版社
- 保朝魯・賈拉森 (編) (1988) 『東部裕固語話語材料』 蒙古語族方言研究叢書 018.

- 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 布和 (1986)『東郷語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書 007. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 布和他 (編) (1986)『東郷語話語材料』蒙古語族方言研究叢書 009. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 陳乃雄 (1987)『保安語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書 010. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 陳乃雄 他 (編) (1986)『保安語話語材料』蒙古語族方言研究叢書 012. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 江畑冬生 (2005)「サハ語(ヤクート語)の時間・空間を表わす名詞につく派生接辞」中山俊秀・塩原朝子(編)『記述研究から明らかになる文法の諸問題』27-36. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 江畑冬生 (2006)『サハ語文法』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 江畑冬生 (2012)『サハ語名詞類の研究 —接辞法と統語機能を中心に—』東京大学大学院人文社会系研究科提出の博士論文
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding morphology*. [2nd edition] London: Hodder Education.
- 服部四郎 (1950)「附属語と附属形式」『言語研究』15
- 林徹 (1995)『トルコ語 文法の基礎 Ver. 2.1』東京外国語大学語学教育研究協議会
- Janhunen, Juha (2003a) On the taxonomy of nominal cases in Mongolic. *Altai hakpo*. (Journal of the Altaic society of Korea) 13: 83-90.
- Janhunen, Juha (2003b) Proto-Mongolic. *The Mongolic languages*. 1-29. New York: Routledge.
- Janhunen, Juha (2012) *Mongolian*. London Oriental and African language library 19. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 風間伸次郎 (2013a)「《データ：「所有・存在表現」》モンゴル語」『語学研究所論集』18. 東京外国語大学語学研究所 237-258.
- 風間伸次郎 (2013b)「(特集「所有・存在表現」)まえばき」『語学研究所論集』18号 東京外国語大学語学研究所 95-119.
- Kim, Stephan S. (2003) Santa. *The Mongolic languages*. 346-363. New York: Routledge.
- Kononov, A. N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo jazyka*. Moskwa, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.
- Kullmann and Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso. ltd.
- 栗林均 (1989)「モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触 —中国青海省、甘粛省の「孤立的」モンゴル諸言語を中心に—」北方言語・文化研究会(編)『民族接触 —北の視点から—』東京：六興出版
- 栗林均 (1992)「モンゴル諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大

- 辞典 第4巻』 517-526. 東京：三省堂
- 栗林均・确精扎布（編）（2001）『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（東北大学東北アジア研究センター叢書 4）仙台：東北大学東北アジア研究センター
- 林蓮雲（1985）『撒拉語簡志』中国少数民族語言簡志双書 北京：民族出版社
- Luutonen, J. (2011) *Chuvash syntactic nominalizers. On *-ki and its counterparts in Ural-Altaic languages*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 中嶋善輝（2004）『明解カザフ語文法』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 大竹昌巳（2012）『ダグール語音韻史の再構成』京都大学文学部行動・環境文化学系言語学専修提出の卒業論文
- 小沢重男（1984）『元朝秘史全釈（上）』東京：風間書房
- 小沢重男（1986）『元朝秘史全釈（下）』東京：風間書房
- 小沢重男（1997）『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林
- 小沢重男（2005）『蒙古語文語文法講義 終講（上）』東京：風間書房
- 清格尔泰（1991）『土族語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書013. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 清格尔泰 他（編）（1986）『土族語話語材料』蒙古語族方言研究叢書015. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- Schönig, Claus (2003) *Turko-Mongolic relations*. J. Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 403-419. New York: Routledge.
- 塩谷茂樹（1991）「中国領内の蒙古系孤立的諸言語における接尾辞一覧・蒙古文語索引」『日本モンゴル学会紀要』22・23: 165-199.
- 庄垣内正弘（1989）「チュルク諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第2巻』937-950. 東京：三省堂
- 菅原睦（2015）「チュルク語名詞形態論における‘Oblique base’」2014年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会レジュメ
- 高島尚生（2008）『基礎トゥヴァ語文法』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 梅谷博之（2017）「モンゴル語の副動詞語尾 -talの後に現れる接尾辞 -xに関する覚書」『北方言語研究』7, 69-81.
- Wu Hujiltu (2003) *Bonan. The Mongolic languages*. 325-345. New York: Routledge.
- 山越康裕（2012）『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社
- 鐘進文（2007）『西部裕固語 描写研究』中国少数民族語言文字保護双書 北京：民族出版社
- Zhu Yongzhong et al. (eds.) (2005) *Folktales of China's Minhe Mangghueer*, Language of the World/Text Library, Lincom, Europa.

A contrastive and comparative study between Turkish *-ki(n)* and Mongolian *-x*

Shinjiro, KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

The element *-ki(n)* in Turkish and the element *-x* in Khalkha Mongolian reveal remarkable synchronical resemblance on the aspects of both forms and functions. They show the same problems whether they are suffixes or “clitics”, and whether they are inflexional elements or derivational elements. For the same reason they are quite interesting from a typological viewpoint.

On the other hand, the cognate forms are probably found in all the Turkic and Mongolian languages. Thus the diachronical development from the proto-form and the direction of borrowing (from Turkic to Mongolian or another way) are important problems and have been argued until now.

In this article I contrast the productivity and the function of the two forms in question (the Turkish *-ki(n)* and the Khalkha Mongolian *-x*) by elicitation from native speakers. I then survey previous descriptive studies of Turkic and Mongolian languages in order to consider the original function of these elements and the direction of the borrowing.

I point out the following conclusions from the contrastive and synchronical viewpoint:

(1) The genitive form followed by *-ki(n)* in Turkish can refer not only to concrete things but also to places and groups of people. Thus some of the usage of Khalkha Mongolian *-x* (such as “Local CbS *-x*” and “Collective CbS *-xan*” in Kullmann and Tserenpil (1996)) are also attested in the Turkish *-ki(n)*.

(2) In the same way as the locative followed by *-ki(n)* in Turkish functions as a noun, the dative-locative followed by *-x* in Khalkha Mongolian functions not only as a (adjectival) modifier but also as a noun. However the third person particle is necessary to follow it as is the case with the nominal use of an adjective in Khalkha Mongolian.

(3) There is a remarkable difference between the Turkish *-ki(n)* and the Khalkha Mongolian *-x* that a temporal word can take the former directly but cannot take the latter, and vice versa.

From the diachronical viewpoint I identified some problems but the findings were inconclusive. The issue of the historical development remains to be explored in future studies.